

弥生時代のはじまりと東西交流

縄文時代から弥生時代に移りかわる時期は、水稻農耕がはじまり、日本列島で最も大きな変化をむかえる時期です。この時期は、大きくみて、朝鮮半島南部に由来する文化が九州北部で受け入れられ、そこから西日本に伝わりと理解されています。弥生時代前期に広がる遠賀川式土器はその代表といえるでしょう。ところが、近年では、西日本各地で、東日本の土器がみつき、東西の交流はより活発であることがわかってきました。

津島岡大遺跡のある岡山平野をはじめ、瀬戸内地方は西日本の交通路として、現代にいたるまで重要な地域です。縄文時代の終わりから弥生時代のはじまりの時期についても、活発な往来のある交通路であったのでしょう。そこで、今回は津島岡大遺跡に持ち込まれた東西の土器や技術などをみてみたいと思います。

ところで、弥生時代のはじまりは、一般的には水稻農耕の出現を目印にしています。そして、西日本で突帯文土器が広がるころは、縄文時代晩期後半、もしくは弥生時代早期と呼ばれています。しかし、九州北部を除いては、水田の存在は不明瞭な状況ですので、ここでは九州北部以外の地域については、突帯文期と呼ぶこととします。 (中村 大介)



水田
(津島岡大遺跡第27次調査、
岡山大学創立五十周年記念館)



河のなかに残された堰 (津島岡大遺跡第23次調査、文化科学系総合研究棟)



取水口付近に置かれた壺 (津島岡大遺跡第23次調査)

突

帯文期から弥生時代前期にかけては右の地図のような土器のまとまりがみられます。今回は、津島岡大遺跡に関する地域のみを示しましたが、そのなかで、同遺跡は突帯文土器の地域に位置します。なお、突帯文期に続く弥生時代前期には、突帯文土器のほぼ同じ範囲に遠賀川式土器が分布します。

また、当時の全体的な状況として、突帯文期のはじめに、朝鮮半島から大きな文化の流入があり、これには石包丁などの磨製石器も含まれていました。ただし、以下では、広い範囲の交流をみるため、土器を中心に考えてみたいと思います。



津島岡大遺跡と交流のあった地域(●は津島岡大遺跡、太い矢印は文化、細い矢印は土器の移動・影響を示しています。)

西から来た土器

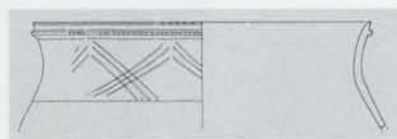


外面

窪木遺跡(総社市)の壺
(岡山県教育委員会提供)



津島岡大遺跡の壺(津島岡大遺跡第3次調査)



松山平野の突帯文(愛媛県大湊遺跡)



山形

斜格子

岡山平野の突帯文
(津島岡大遺跡第3次調査、サテライトベンチャービジネスラボトリー)

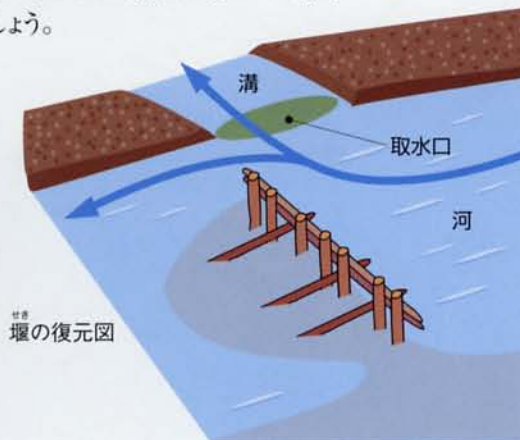
突帯文期

朝鮮半島を起源として、九州北部を経て西日本にもたらされた、全面を赤く塗られた壺は、それまでにない最も目新しい容器でした。典型的なものは、瀬戸内地方では松山平野で多く出土しており、総社市の窪木遺跡でもみられます(左写真上)。津島岡大遺跡には形態的にその影響を受けたものがあります(左写真下)。

また、突帯文土器には文様が施されることがあります。文様には地域的な特徴があり、岡山平野あたりでは数本の線が山形に刻まれるのが一般的ですが(左下写真)、松山平野ではこれに加え、斜格子に線が刻まれるものも多くみられます。津島岡大第3次調査にもこの斜格子の文様があり、松山平野との関係がうかがわれます(左図と左下写真)。

弥生時代前期

西日本全域に遠賀川式土器が広がり、土器全体が九州北部から伝わったものになります。さらに、水田や灌漑施設などの新しい技術も伝わりました(表紙写真及び、下の復元図)。また、津島岡大遺跡では、水利がうまくいくように願って取水口付近に置かれた壺がみつかっています(表紙右下)。このような壺を使った祭祀は九州地方でもみられ、水田に伴って、体系的に西日本に伝わったのでしょう。



東から来た土器

突帯文期

北陸地方の影響を受けた、もしくはそこから持ち込まれた土器が津島岡大遺跡第3次調査から出土しています。(右写真)。このような土器は瀬戸内地方では、四国の香川県林・坊城遺跡で出土しており、時期も津島岡大遺跡のものと同時期です。また、津島岡大遺跡の事例より新しい時期では、近隣の百間川沢田遺跡から、中部地方を中心に分布する浮線文土器が出土しています。



北陸地方の文様を持つ土器
(上・下とも津島岡大遺跡第3次調査)

弥生時代前期

文様から東北地方南部の大洞式土器と考えられる、壺か鉢の一部が第23次調査から出ています(右下写真)。精良なつくりで、この調査地点の他の土器と比べて異質であるので、東北地方南部には全く同じモチーフはないものの、そこから持ち込まれたものの可能性があります。

東日本の文様をもつ土器は、中国地方に限らず、西日本全体にみられます。また、そのような土器は一樣ではなく、津島岡大遺跡でみられたように、北陸や東北地方南部など、さまざまな地域の土器が持ち込まれたり、その土地の土器に影響を与えたりしています。東日本と関係する土器の数自体は多くないのですが、その文様は弥生土器の文様に強い影響を与えたという考えもあります。

これまでみてきたように、津島岡大遺跡でも、東西日本の各地からきた、もしくは影響をうけた土器がありました。東日本の土器がみられることは、東日本のひとびとが新たな文化との接触を求めた結果でしょうか？その意味は今後の研究の進展にゆだねるとして、突帯文土器の範囲のなかのローカルな交流も含め、津島岡大遺跡も東西のひとびとの出会いの場所であったのでしょうか。



東北地方南部の文様を持つ土器
(津島岡大遺跡第23次調査)

Column

弥生時代がはじまるころの気候

地球が誕生してから、その気候は暖かくなったり、寒くなったりの繰り返しです。日本の過去1万年間では、BC5000年(7000年前)ごろからヒブシサーマル期という温暖期をむかえ、縄文海進もピークになります。それ以後、気温は上昇と下降の波を繰り返しながら、寒くなっていきました。それに伴い、海退も幾度かみられます。そして、今回、扱った弥生時代のはじまりのころは、縄文海進以後の最も寒い時期です(右図の黄色の範囲)。

現在、縄文文化に対して、豊かな狩猟採集民というイメージが一般的にもたれています。しかし、水稻農耕が始まるのが、最も寒い時期であることは、やはり、安定した食料獲得の方法を模索したためではないでしょうか。東西のひとびとが活発に動き回る時期はしばしばみられますが、この時期の場合は、新しい生活方法の情報を求めた結果かもしれません。(右図は小泉格1995をもとに作成)

参考文献:小泉格1995「地球環境と文明の周期性」
『講座文明と環境第1巻地球と文明の周期』朝倉書店

●現在と比較した平均気温の差



2005年10月20～22日に岡山大学附属病院南病棟1階で、鹿田遺跡の古代と中世の遺物・遺構から鹿田庄を考えようという目的の展示を行いました。3日間の会期中に344人の見学者が訪れました。入院されている方や、お見舞いにこられた方、病院のスタッフの皆さんも、見学にいらっしやり、普段、埋蔵文化財に接する機会のない方がたにも関心をもっていただきました。

今回の展示では、遺構の大きさや質感などを体験できるように工夫しました。そのために、古代の建物の大きさを体験できるように間取りを復元したり、古代と中世の井戸杵を室内に持ち込んだりと、新たな展示を試みました。特に古代の井戸杵は存在感があり、人気を集めました。井戸杵などは重く、持ち込むのは大変でしたが、展示はとても好評でした。なお、展示の際は医学部管理課の御協力を得ました。



古代の井戸杵



中世の井戸杵の模型と実物



「鹿田遺跡と鹿田庄」の展示の様子



展示を楽しむ子供たち

第9回発掘成果展

「行き交う人とのもの」



体験学習の猿人形作り

恒例の津島キャンパスでの展示会は、2005年10月26～30日の5日間の開催で、175人の見学者が訪れました。

中世の土器が徐々に変化する様子を並べて展示したり、大きな日本地図の上に、古代から中世に特産となっていた土器や陶磁器をおいて、津島岡大遺跡にどのものがきているのかをわかるように展示したりしました。意外な人気を集めたのが、赤外線カメラで、普通では見えない文字が赤外線照射することで、見えるようになるところが興味深いという意見をいただきました。

さらに今回は、鹿田遺跡から出土した「木製の猿回しの猿人形」をモデルにした人形に色を塗ろうという体験学習を実施しました。木、オープン陶土、紙粘土と素材もいろいろそろえ、人形の模型をつくりました。木が一番、本物らしくみえ、人気が高かったです。今回も展示、体験学習ともに好評でした。



地図の上に陶磁器をのせた展示

編集後記

理化学的測定法により、弥生時代のはじまりを古く考える説がだされ、現在、これに関する年代論が盛んになっています。一方、津島岡大遺跡をはじめ瀬戸内地方には、東西からの文化の波及を知るうえで、興味深い事象が多く残されています。一部には年代論にも関係するものがあり、重要な地域といえるでしょう。今後の研究の進展が望まれます。(中村 大介)